

雨

織田作之助

青空文庫

一

子供のときから何かといえは跣足はだしになりたがった。冬でも足袋たびをはかず、夏はむろん、洗濯せんたくなどするときは決きまつていそいと下駄をぬいだ。共同水道場の漆喰しっくいの上を跣足のままペタペタと踏ふんで、ああええ氣持やわ。それが年ごろになつても止まぬので、無口な父親もさすがに冷えるぜエと、たしなめたが、聴かなんだ。

蝸牛かたつむりを掌てのひらにのせ、腕を這わせ、肩から胸へ、じめじめとした感触たのを愉しんだ。

また、錢湯で水を浴びるのを好んだ。湯氣のふきでている裸にぎあツと水が降りかかつて、ピチピチと弾はみきつた肢態したいが妖あやしく顫ふるえながら、すくツと立った。官能がうずくのだった。何度も浴びた。「五へんも六ぺんも水かけまんねん。ええ氣持やわ」と、後年夫の輕部かるべに言つたら、若い輕部は顔をしかめた。

そんなお君が輕部と結婚したのは十八の時だった。輕部は大阪天王寺第×小学校の教員、出世がこの男の固着觀念で、若い身空で淨瑠璃じゅうりなど習っていたが、むろん淨瑠璃ぐるい

の校長に取りいるためだった。下寺町の広沢八助に入門し、校長の相弟子たる光榮に浴していた。なお校長の驥尾きびに附つして、日本橋五丁目の裏長屋に住む浄瑠璃本写本師、毛利金助に稽古本けいこほんを註文したりなどした。

お君は金助のひとり娘だった。金助は朝起きぬけから夜おそくまで背中をまるめてこつこつと浄瑠璃の文句を写しているだけが能のうの、古ぼけた障子しょうじのようにひっそりした無気力な男だった。女房はまるで縫物をするために生れてきたような女で、いつ見ても薄暗い奥の間にぺたりと坐りこんで針を運ばせていた。糖尿病をわずらってお君の十六の時に死んだ。

女手がなくなつて、お君は早くから一人前の大人並みに家の切りまわしをした。炊事、縫物、借金取ことわの断り、その他写本を得意先に届ける役目もした。若い見習弟子がひとりいたけれど、薄ぼんやりで役にもたたず、邪魔になるというより、むしろ哀れだった。

お君が上本町九丁目の軽部の下宿先へ写本を届けに行くと、二十八の軽部はぎよろりとした眼をみはった。裾すそから二寸も足が覗のぞいている短い着物をお君は着て、だから軽部は思

わず眼をそらした。女は出世のさまたげ。熱っぽいお君の臭いにむせながら、日ごろの持論にしがみついた。しかし、三度目にお君が来たとき、

「本に間違いないか今ちよつと調べてみるよつてな。そこで待つとりや」

と、座蒲団をすすめておいて、写本をひらき、

「あと見送りて政岡が……」

ちらちらお君を盗見していたが、しだいに声もふるえてきて、生つばを呑みこみ、

「ながす涙の水こぼし……」

いきなり、霜焼けした赤い手を掴つかんだ。声も立てぬのが、軽部には不気味だった。その時のことを、あとでお君が、

「なんやこう、眼工の前がぱつと明あうなったり、真黒けになつたりして、あんたの顔こつて牛みたいに大けな顔に見えた」

と言つて、軽部にいやな想いをさせたことがある。軽部は小柄なわりに顔の造作が大きく、太い眉毛の下にぎよろりと眼が突き出し、分厚い唇の上に鼻うぬぼがのしかかつていて、まるで文楽人形の赤面みたいだが、彼はそれを雄大な顔と己惚うぬぼれていた。けれども、顔のことに触れられると、何がないいい気持はしなかった。……その時、軽部は大きな鼻の穴か

らせわしく煙草たばこのけむりを吹きだしながら、

「このことは誰にも黙ってるんやぜ、分つたやろ、また来るんやぜ」

と、だめ押した。けれども、それきりお君は来なかった。

軽部は懊惱おうのうした。このことはきつと出世のさまたげになるだろうと思った。ついでに、良心の方もちくちく痛んだ。あの娘は妊娠しよるやろか、せんやろかと終日思い悩み、金助が訪ねてこないだろうかと怖れた。「教育上の大問題」そんな見出しの新聞記事を想像するに及んで、苦悩は極まった。

いろいろ思い案じたあげく、今のうちにお君と結婚すれば、たとえ妊娠しているにしてもかまわないわけだと、気がつき、ほつとした。なぜこのことにもっと早く気がつかなかったか、間抜けめとみずから嘲あざけった。けれども、結婚は少くとも校長級の家の娘とする予定だった。写本師風情ふぜいとの結婚など夢想だに値しなかったのだ。わずかに、お君の美貌びぼうが軽部を慰めた。なぐさ

某日、軽部の同僚と称して、蒲地某が宗右衛門の友恵堂の最中もなかを手土産に出しぬけに金助を訪れ、呆氣あつけにとられている金助を相手によもやまの話を喋り散しゃべらして帰って行き、金助にはさっぱり要領の得ぬことだった。ただ、蒲地某の友人の軽部村彦という男が品行方

正で、大變評判のいい血統の正しい男であるということだけが臍おぼろげにわかった。

三日経つと当の輕部がやつてきた。季節はずれの扇子などを持っていた。ポマードでびつたりつけた頭髮を二三本指の先で揉もみながら、

「じつはお宅の何を小生の……」

妻にいただきたいと申し出でた。

金助がお君に、お前は、と訊きくと、お君は、おそらく物心ついてからの口癖であるらしく、表情一つ動かさず、しいていうならば、綺麗きれな眼の玉をくるりくると廻した可愛い表情で、

「私あてか、私はどないでもよろしおま」

あくる日、金助が輕部を訪れて、

「ひとり娘のことですさかい、養子ちゆうことにしてもらいましたら……」

都合がいいとは言わせず、輕部は、

「それは困ります」

と、まるで金助は叱ちられに行つたみたいだった。

やがて、輕部は小宮町に小さな家を借りてお君を迎えたが、この若い嫁に「だいたいに

おいて」満足していると同僚たちに言いふらした。お君は白い綺麗なからだをしていた。なお、働き者で、夜が明けるともうぱたと働いていた。

「ここは地獄の三丁目、行きはよいよい帰りは怖い」

と朝っぱらから唄^{うた}うたが、間もなく軽部にその卑俗性を理由に禁止された。

「浄瑠璃みたいな文学的要素がちよつともあれへん」

と、言いきかせた。彼は国漢文中等教員検定試験の勉強中であつた。それで、お君は、

「あわれ逢瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と、名残りの文のいいかわし、毎夜毎夜の死覚悟、魂抜けてとぼとぼうかうか身をこがす……」

と、「紙治」のサワリなどをうたつた。下手^{へた}くそもあつたので、軽部は何か言いかけたが、しかし、満足することにした。

ある日、軽部の留守中、日本橋で聞いたんですがと、若い男が訪^{たず}ねてきた。

「まあ、田中の新ちゃんやないの。どないしてたんや」

もと近所に住んでいた古着屋の息子の新ちゃん、朝鮮の聯隊に入営していたが、昨日除隊になって帰ってきたところだという。何はともあれと、上るなり、

「嫁はんになったそうやな。なぜわいに黙って嫁入りしたんや」

と、新ちゃんは詰問きつもんした。かつて唇を三回盗まれたことがあり、体のことがなかったのは、たんに機会の問題だったと今さら口惜しがっている新ちゃんの肚はらの中などわからぬお君は、そんな詰問は腑ふに落ちかねたが、さすがに日焼けした顔に泛うかんでいるしよんぼりした表情を見ては、哀れを催もよおしたのか、天婦羅てんぷら丼を註文した。こんなものが食えるものかと、お君の変心を怒りながら、箸はしもつけずに帰ってしまった。そのことを夕飯のとき軽部に話した。

新聞を膝ひざの上に拡げたままふんふんと聴いていたが、話が唇のことに触れると、いきなり、新聞がばさりと音を立て、続いて箸、茶碗、そしてお君の頬がびしやりと鳴った。声が先であとから大きな涙がぼたぼた流れ落ち、そんなおおげさな泣き声をあとに、軽部は憂鬱ゆううつな散歩に出かけた。出しなに、ちらりと眼にいれた肩の線が何がなし悩ましく、ものの三十分もしないうちに帰ってくると、お君の姿が見えぬ。

火鉢の側に腰を浮かして半時間ばかりうずくまっていると、

「魂抜けて、とぼとぼうかうか……」

声がかきこえ、湯上りの匂いをぶんぶんさせて、帰ってきた。その顔を一つ撲なぐってから、

軽部は、

「女いうもんはな、結婚まえには神聖な体でおらんといかんのやぞ。キッスだけのことで……」

言いかけて、お君を犯したことをふと想いだし、何か矛盾^{むじゆん}めくことを言うようだったから、簡単な訓戒に止めることにした。

軽部はお君と結婚したことを後悔した。しかし、お君が翌年の三月男の子を産むと、日くを繰くつてみて、ひやつとし、結婚してよかったと思つた。生れた子は豹一と名づけられた。日本が勝ち、ロシヤが負けたという意味の唄がまだ大阪を風靡^{ふうび}していたときのことだった。その年、軽部は五円昇給した。

その年の暮、二ツ井戸の玉突屋日本橋クラブの二階広間で広沢八助連中素人浄瑠璃大会が開かれ、聴衆約百名、盛会であつた。軽部村彦こと軽部村寿はそのときはじめて高座に上つた。はじめのことゆえむろん露払いで、ばらりばらりと集りかけた聴衆の前で簾^{すだれ}を下したまま語つたが、それでも沢正才！と声がかかったほどの熱演で、熱演賞として湯呑一個もらつた。露払いをすませ、あと汗びしよのまま会の接待役としてこまめに立ち働いたのが悪かつたのか、翌日から風邪をひいて寝こんだ。こじれて急性肺炎になった。か

なりいい医者に診てもらったのだが、ぽくりと死んだ。涙というものは何とよく出るものかと思議なほど、お君はさめざめと泣き、夫婦はこれではなくては値打がないと、ひとびとはその泣きぶりに見とれた。

しかし、二七日の夜、追悼^{ついでう}浄瑠璃大会が同じく日本橋クラブの二階広間で開かれると、お君は赤ん坊を連れて姿を見せ、校長が語った「紙治」のサワリで、ぱちぱちと音高く拍手した。手を顔の上にあげ、人眼につき、ひとびとは顔をしかめた。軽部の同僚の若い教員たちは、何か肚の中でお互いの妻の顔を想い^{うか}泛^うべて、ずいぶん頼りない気持を顔に見せた。校長はお君の拍手に満^{まん}悦^{えつ}したようだった。

三七日の夜、親族会議が開かれた席上、四国の田舎から来た軽部の父が、お君の身の振り方につき、お君の籍は金助のところへ戻し、豹一も金助の養子にしてもらたらどんなもんじゃけん、渋い顔して意見を述べ、お君の意嚮^{いこう}を訊^きくと、

「私^{あて}でつか。私はどないでもよろしおま」

金助は一言も意見らしい口をきかなかった。

いよいよ実家に戻ることになり、豹一を連れて帰ってみると、家の中は呆^{あき}れるほど汚か

った。障子の棧さんにはべたツと埃ほこりがへばりつき、天井には蜘蛛くもの巣がいくつも、押入れには汚れ物がいっぱいあった。……お君が嫁とついだ後、金助は手伝い婆さんを雇やとつて家の中を任せていたのだが、選りによつて婆さんは腰が曲り、耳も遠かった。

「このたびはえらい御不幸な……」

と挨あいさつ拶した婆さんに抱いていた子供を預けると、お君は一いち張羅ちやうらの小浜縮緬の羽織も脱がず、ぱたぱたとそこらじゅうはたきをかけはじめた。

三日経つと家の中は見違えるほど綺麗になった。婆さんは、じつは田舎の息子がと自分から口実を作つて暇をとつた。ここは地獄の三丁目、の唄が朝夕きかれた。よく働いた。そんなお君の帰つてきたことを金助は喜んだが、この父は亀のように無口であつた。輕部の死についてもついぞ一言も纏まとまつた慰めをしなかつた。

古着屋の田中の新ちゃんはずでに若い嫁をもらつており、金助の抱いて行つた子供を迎えにお君が男湯の脱衣場へ姿を見せると、その嫁も最近生れた赤ん坊を迎えに来ていて、仲よしになった。雀斑そばかすだらけの鼻の低いその嫁と比べて、お君の美しさはあらためて男湯で問題になった。露骨ろこつに俺の嫁になれと持ちかけるものもあつたが、笑つていた。金助へ話をもつて行くものもあつた。その都度、金助がお君の意見を訊くと、例によつて、

「私^{あて}はどないでも……」

いいが、俺はいやだと、こんどは金助は話をうやむやに断った。

夏、寝苦しい夜、軽部の乱暴な愛撫^{あいぶ}が瞼^{まぶた}に重くちらついた。見習弟子はもう二十歳になつていて、白い乳房を子供にふくませて転寝^{うたたね}しているお君の肢態に、狂わしいほど空しく胸を燃やしていたが、もともと彼は氣も弱くお君も問題にしなかった。

五年経ち、お君が二十四、子供が六つの年の暮、金助は不慮の災難であつて死んでしまった。その日、大阪は十一月末というのに珍しくちらちら粉雪が舞うていた。孫の成長とともにすっかり老いこみ耄碌^{もうろく}していた金助が、お君に五十銭貰^{もら}い、孫の手を引つばつて千日前の樂天地へ都築文男一派の新派連鎖劇を見に行った帰り、日本橋一丁目の交叉点で恵美須町行きの電車に敷かれたのだった。救助網に撥ね飛^はばされて危うく助かった豹一が、誰に貰ったのか、キャラメルを手を持ち、ひとびとにとりかこまれて、わあわあ泣いているところを見た近所の若い者が、

「あッ、あれは毛利のちんぴらや」

と、自転車走らせて急を知らせてくれ、お君が駆^かけつけると、黄^{たそがれ}昏の雪空にもう電

気をつけた電車が何台も立往生し、車体の下に金助のからだ丸く転がっていた。

ぎゃツと声を出したが、不思議に涙は出ず、豹一がキャラメルのにちやくちやひついた手でしがみついていたとき、はじめて咽喉のどのなが熱くなった。そして何も見えなくなった。やがて活気づいた電車の音がした。

その夜、近くの大西質店の主人が大きな風呂敷を持ってやってき、おくやみを述べたあと、

「じつは先達せんだつてお君はんの嫁入りの時、支度の費用やいうて、金助はんにお金を御融ごゆうず通うしましてん。そのとき預ったのが利子もはいつてまへんで、もう流れてまんねんけど、何やこうお君はんの家では大切な品もんや思いまんで、相談はなしによつては何せんこともおまへん、と、こない思いましたな。いずれ電車会社の……」

慰謝金を少くも千円と見こんで、これでんねんと差し出した品を見ると、系図一卷と太刀一振であった。ある戦国時代の城主の血をかすかに引いている金助の立派な家柄がそれでわかるのだったが、はじめて見る品であった。金助からさような家柄についてついぞ一言もきかされたこともなく、むろん軽部も知らず、軽部がそれを知らずに死んだのは彼の不幸の一つだった。お君にそれを知らさなかった金助も金助だが、お君もまたお君で、

「そんなもん私には要用おまへん」

と、大西主人の申出を断り、その後、家柄のことなど忘れてしまった。利子の期限云々とむろん慾にかかつて執拗にすすめられたが、お君は、ただ気の毒そうに、

「私にはどうでもええことでつきかい。それになんでんねん……」

電車会社の慰謝金はなぜか百円そこその零碎な金一封で、その大半は暇をとることになった見習弟子にくれてやる肚だった。

そんなお君に中国の田舎から来た親戚の者は呆れかえって、葬式、骨揚げと二日の務めをすますと、さつさと帰って行き、家の中ががらんとしてしまった夜、異様な気配にふと眼をさまして、

「誰？」

と暗闇に声を掛けたが、答えず、思わぬ大金をもらって気が変になったのか強くなつたのか、こともあろうにそれは見習弟子だとやがて判った。抗ったが、なぜか体が脆かった。

あくる日、見習弟子は不思議なくらいしよげ返ってお君の視線を避け、むしろ哀れであったが、夕方国元から兄と称する男が引取りに来ると、彼はほつとしたようだった。永

々厄やつかい介な小僧をお世話様でしたのうと兄が挨拶あいさつしたあと、ぺこんと頭を下げ、

「ほんの心じゃけ、受けてつかわさい」

と、白い紙包を差し出して、こそこそ出て行つた。

見ると、写本の書体で、ごぶつぜんとあり、お君がくれてやった金がそっくりそのままはいつていた。国へ帰つて百姓すると言つた彼の貧弱な体やおどした態度を憐み、お君はひとけのなくなつた家の中の空虚さにしばらくはぼかんと坐つたきりであつたが、やがて、

「船に積んだアら、どこまで行きやアる。木津や難波なんばアの橋のしイたア」

と、哀調を帯びた子守唄を高らかに豹一に聴かせた。

上塩町地藏路次の裏長屋に家賃五円の平屋を見つけて、そこに移ると、さつそく、裁縫教えますと小さな木札を軒先に吊るした。長屋の者には判読しがたい変つた書体で、それは父親譲り、裁縫は、絹物、久留米物など上手とはいえなかったが、これは母親譲り、月謝五十銭の界限かいわいの娘たち相手にはどうなりこうなり間に合い、むろん近所の仕立物も引き受けた。

あわただ
慌しい年の暮、頼まれた正月着の仕立に追われて、夜を徹する日々が続いたが、ある夜
更け、豹一がふと眼をさますと、スウスウと水^{みず}漬^{ばな}をすする音がきこえ、お君は赤い手で
火鉢^{ひばち}の炭火を掘りおこしていた。戸外では霜の色に夜が薄れて行き、そんな母親の姿に豹
一は幼心にもふと憐みを感じたが、お君は子供の年に似合わぬ同情や感傷など与^{あずか}り知らぬ
母だった。

「お君さんは運^{かた}が悪うおますな」

と、慰め顔の長屋の女たちにも、

「しかたおまへん」

と、笑つてみせ、相つづく不幸もどこ吹いた風かといった顔だったから、愚痴の一つも
聞いてやり、貰^{もら}い泣きの一つぐらいはさしてもらいましよと期待した長屋の女たちは、何
か物足らなかった。

大阪の町々の路次にはよく石地蔵が祀^{まつ}られており、毎年八月末に地蔵盆^{じざんぼん}の年中行事が行
われた。お君の住んでいる地蔵路次は名前の手前もあり、よそに負けず盛大に行われた。
と、いつても、むろん貧乏長屋のことゆえ、戸ごとに絵行灯をかがげ、狭苦しい路次の中
で界限の男や女が、

「トテテラチンチン、トテテラチン、チンテンホイトコ、イトハイコ、ヨヨイトサツサ」と踊るだけのことだが、お君はむりをして西瓜^{すいか}二十個寄進し、薦^{すす}められて踊りの仲間に加った。お君が踊りに加ったため、夜二時までの警察のお達しが明け方まで忘れられた。相変らず、銭湯で水を浴びた。肌は娘のころの艶を増していた。ぬか袋を使うのかと訊^きかれた。水を浴びてすくつと立っている眼の覚めるような鮮かな肢態に固唾^{かたず}を呑むような嫉妬^{しつと}を感じていた長屋の女が、ある時、お君の頸筋^{くびすじ}を見て、

「まあ、お君さんたら、頸筋に生毛いっぱい……」

生えているのに気がついたのを倅^{さいわ}い、おおげさに言うので、銭湯の帰り、散髪屋へ立ち寄ってあたってもらった。

剃^{かみそり}刀が冷やりと顔に触れたとたん、どきツと戦慄^{せんりつ}を感じたが、やがてさくさくと皮膚^ひの上を走って行く快い感触^{こころよ}に、思わず体が堅くなり、石鹼と化粧料の匂いの沁^しみこんだ手が顔の筋肉をつまみあげるたびに、体が空を飛び、軽部を想いだした。

そのようなお君にその職人の村田は商売だからという顔をときどき鏡にたしかめてみなければならなかった。しかし、その後月に二回はかならずやってくるお君に、村田は平

気でおれず、ある夜、新聞紙に包んだセルの反物を持って路次へやってきて、

「思いきって一張羅イをはりこみましてん。すんまへんがひとつ……」

縫うてくれと頼むと、そのままぎこちない世間話をしながらいつまでも坐りこみ、お君を口説く機会を今だ今だと心に叫んでいたが、そんな彼の肚を知ってか知らずにか、お君は長願寺の和尚さんももう六十一の本卦ですなというつまらぬ話にも、くるりくるりと綺麗な眼玉を廻して、けらけら笑っていた。豹一は側に寝そべっていたが、いきなり、つと起き上ると、きちんと両手を膝に並べて、村田の顔を覗め、何か年齢を超えて挑みかかってくる視線だと、村田は怖れ見た。

やがて村田は自身の内気を嘲りながら帰って行つた。路次の入口で放尿した。その音を聞きながら、豹一はごろりと横になった。

二

豹一は早生れだから、七つで尋常一年生になった。学校での休憩時間には好んで女の子と遊んだ。少女のようにきやしやな体の色白のこぢんまり整った顔は女教師たちに可

愛がられていたが、自分の身なりのみすぼらしさを恥じていた。

はにかみ屋であつたが、一週間に五人ぐらい、同級の男の子が彼に撲られて泣いた。子供にしてはあまり笑わず、泣けば自分の泣き声に聴き惚れているかのような泣き方をした。泣き声の大きさは界隈かいわいの評判で、やんちゃ坊主であつた。路地の井戸端に祀まつられた石地藏に、あるとき何に腹立つてか、小便をひっかけた。お君は氣の向いた時に叱つた。

豹一は近くの長願寺の和尚に将棋しょうぎを習つた。和尚は無類のお人よしであつたが、将棋好きのためしばしば人にきらわれた。助言をしたといつてはその男と一週間も口を利かず、奇想天外の手やと言つて第一手に角の頭の歩を突くような嫌味な指し方をしたり、賭かけないと氣が乗らぬとて煙草でも賭けると、たつた胡蝶やカメリヤ一個のことで生死を賭けたような汚い将棋をし、負けると破産したような顔で相手を恨うらむといった風で、もともと上手とはいえないし誰にも敬遠されて、相手のないところから、ちよくちよく境けいだい内の蓮池の傍へ遊びに来る豹一に教えてやることにしたのだ。

筋がよいのか最初歩三つが一日経つと角落ちになり、やがて平手で指せた。ある日、和尚は、

「豹ぼん。何ぞ賭けんとおもろくないな。和尚おつさんは白しろ餡あめいりの饅頭おまん六つ賭けるさかい、

豹ぼんは……」

何も賭けるものがないので、負けたら蓮池から亀の子を掴^{つか}まえて、和尚にくれてやることにした。実力以上の長考をしたが、ハメ手に掛^かつて負けた。

夕闇の色を吸いこんで静まりかえった蓮池の面を覗^みめ、豹一はいつまでも境内にいた。

和尚は檀家へ出かけた。将棋は負けても、亀の子を掴^{つか}まえるのは上手だと豹一は力んだが、空しくあたりはすっかり夜が落ち、木魚^{もくぎよ}の音を悲しく聞いた。亀の子がなかなか掴^{つか}まらぬのですっかり自信をなくし、胸が苦しく焦^{あせ}り騒^{さわ}いで、半分泣いた。ふと、自分を呼ぶ声にうしろ向くと、

「ごはんも食べんと何してるのや」

門のところで母親が怖い顔して睨^{にら}んでいた。

「亀とろ思てるのや」

と言うと、

「あほんだらやな」

と叱^{しか}られ、それで存分に泣き声を出した。泣くのとまらぬいつもの癖で、まるで泣き声^{なぐ}で顔を撲^{なぐ}られている気がお君はして、

「泣きやまんと、池の中に放りこんだるぞ。かめへんか」

「かめへんわい。放りこんだら着物よごれて、母ちゃんが洗濯せんらんだけや。そないなつたら困るやろ」

困るもんかと、豹一を抱きかかえて、お君は池の泥水へどぶんとつけた。豹一は手をばたばたさせ、半分は亀の子を探す手つきだった。引き揚げて家へ連れ戻ると、お君は盥^{たらい}を持ちだした。

八つの時、学校から帰ると、いきなり、仕立ておろしの久留米^{くるめ}の綿入を着せられた。筒^{つつ}つぽの袖^{そで}に鼻をつけると、紺^{こん}の匂いがぶんぶん鼻の穴にはいつてきて、気取り屋の豹一には嬉しい晴着^{うれ}だった^{うれ}が、さすがに有頂天^{うちようてん}になれなかった。お君はいつになく厚化粧し、その顔を子供心にも美しいと見たが、なぜかうなずけなかった。仕付糸をとってやりながら、

「向う様^{さん}へ行つたら行儀ようするんやぜ」

お君は常の口調だったが、豹一は何か叱られていると聴いた。

路次の入口に人力車が三台来て並ぶと、母の顔は瞬間面^{めん}のようになり、子供の分別が

らそれを二十六歳の花嫁の顔と見て、取りつく島もないしよんぼりした気持になった。

火の気を消してしまった火鉢の上に手をかざし、張子の虎のように抜衣紋ぬきえもんした白い首をぬつと突き出して、じじむさい恰好かつこうで坐つているところを、豹一は立たされ、人力車に乗せられた。見知らぬ人が前の車に、母はその次に、豹一はいちばん後の車。一人前の車の上にちよこんと収つてゐる姿をひねてると思つたか、車夫は、

「坊ぼん坊ぼん、落おちんようにしつかり掴つかまつてなはれや」

その声に母はちらりと振り向いた。もう日が暮れていた。

「落おてへんわい」

と、豹一はわざとふざけた声で言い、その声が暗闇の中に消えて行くのをしんみり聴いた。ふわりと体が浮いて、人力車は走りだした。だんだん暗さが増した。

ひっそりとした寺がいくつも並んだ寺町を通るとき、木犀もくせいの匂いがした。豹一は眩暈めまいがし、一つにはもう人力車に酔うていたのだ。梶棒かじぼうの先につけた提灯ちようちんの光が車夫の手の静脈を太く浮び上らしていた。尋常二年の眼で提灯に書かれた「野瀬」の二字を判読しようとしていたが、頭の血がすうすう引いて行くような胸苦しきで、困難だった。その夜一人で寝た。

蒲団ふとんについたナフタリンの匂いが母親のいない淋さびしさをしみじみ感じさせ、泣くまいとこらえる努力でよけい涙が出た。母は階下の部屋で見知らぬ人といった。野瀬安二郎だあとで分つた。

野瀬安二郎は谷町九丁目いちばんの金持と言われ、慾張りとも言われた。高利貸をして、女房を三度かえ、お君は四度目の女房だった。ことし四十八歳の安二郎がお君を見染めて、縁談を取りきめるまでには、たいした手間は掛らなかつた。

「私あてでつか。私はどないでもよろしおま」

しかし、お君はさすがに、豹一が小学校を卒業したら中学校へやらせてくれと条件をつけ、これはけちんぼな安二郎にはちくちく胸いたむ条件だったが、お君の肩はあまりにも柔かそうでむっちり肉づいていた。

安二郎には子供がなく、さきの女房を死なせると、すぐ女中を雇やとつて炊事をやらせるほか女房の代りも時にはさせていたが、お君が来ると、とたんに女中を追いだし、こんどはお君が女中の代りとなつた。彼は一銭の金もお君の自由に任せず、毎日の市場行きには十銭、二十銭と端金を渡し、帰ると、釣銭を出させた。時には自分で市場へ行き、安鰯いわしを六

匹ほど買うてきて、自分は四匹、あとお君と豹一に一匹ずつ与えた。いつか集金に行つて乱暴されたことがあつてから山谷という破戒僧面をした四十男を雇つて集金に廻らしていたが、むろん山谷は手弁当で、安二郎のところで昼食すら出されたことはなかった。

ある日、山谷は豹一に、

「坊ん坊ん。ええもん見せたる」

こつそり見せてくれたのは、あくどい色のついた小さな絵だった。そして山谷は、お君と安二郎にその絵を結びつけ、口に泡をためて淫みだらな話をした。いきなり、豹一はぎりぎり歯軋はぎしりし、その絵を破つてしまった。

「何すんねん」

山谷が驚いて豹一の顔を見ると、怖いほど蒼白あおしろみ、唇に血がにじんでいた。子供に似に合あわぬ恨うらみの眼がぎらぎらしていた。

誇張こちようしていえば、その時豹一の自尊心は傷ついた。また、しょんぼりした。辱はかしめられたと思ひ、性的なものへの嫌悪けんおもこのとき種を植えつけられた。敵愾てきが心は自尊心の傷から膿うんだ。安二郎を見る眼つきが変つた。安二郎の背中で拳骨を振りまわした。憂ゆう

鬱つにもなった。母は毎晩安二郎の肩をいそいそと揉もんだ。

豹一は一里以上もある道を築港ちっこうまで歩いて行き、黄昏たそがれる大阪湾を眺めて、夕陽を浴びて港を出て行く汽船にふと郷愁を感じたり、訳もなく海に毒づいたりした。

ある日、港の棧橋さんばしで、ヒーヒー泣き声を出したい気持ちをこらえて、その代り海に向つて、

「ばか野郎」

と呶鳴どなり、誰もいないと思つたのが、釣りをしていた男がいきなり振り向いて、

「こら、何ぬかす」

そして白眼をむいている表情が生意氣だと撲なぐられた。泣きながら一里半の道をとぼとぼ歩いて帰った。家へはいると、安二郎は風呂銭を節約しまつしての行水ぎようずいで、お君は袂たもとをたくしあげて背中を流していた。それがすむとお君が行水し、安二郎は男だてらにお君の背中を流した。そのあと、豹一がはいる番だが、豹一は狸寝入りして、呼ばれても起きなかった。

だんだんに憂鬱な少年となり、やがて小学校を卒業した。あらためてお君が中学校へ入れてくれるようにと安二郎に頼んだが、安二郎はとぼけてみせた。軽部が中等学校教員に

なりたがつていたことなどもわからに想いだして、お君はすっかり体の力が抜け、ひっそりと暮した。豹一の優等免状などを膝ひざの上に拡げているのだった。物も言わずに突き膝たンスで筆筒の方へにじり寄り、それをしまいこむその腰のあたりを見ると、安二郎はなぜかおかしいほど狼狽ろうばいして、しぶしぶ承知した。豹一はやがて中学校にはいったのだが、しかし安二郎は懷ふところを傷めなかった。お君は毎日どこからか仕立物を引き受けてきて、その駄賃だちんで豹一の学資を賄まかなった。賃仕事だけでは追いつかず、自分の頭のものや着物を質に入れたり、近所の人に一円、二円と金を借りたりした。高利貸の御寮はんが他人ひとに金を借りるのはおかしいやおまへんかと言われた。

中学生の豹一は自分には許いいなすけ嫁があるのだと言い触らした。哀れな弱小感に箔はくをつけたのだった。周囲を見わたしてみても彼も頭の悪い少年だとわかると、ほっとした。しかし自分の頭のよさにはひどく自信がなかった。だから、たいした苦勞もせず首席になれた時、何かの間違ひではないかと思つた。クラスの者は彼の頭腦に敬服し、怖れをなしていたが、豹一には人から敬服されるなど与あずかり知らぬところだった。だから、自分でもしばしば首席だということを顧かえりみる必要があつた。言いふらした。いつか「首席」が渾名あだなに

なつた。いわば首席の貫禄かんろくがなかったのだ。ふと母親のことや山谷に見せられた怪しい絵のことを想いだすと、

「こんど誰が二番になるやろな」

クラスの者を掴つかまえて言つた。そんな風に首席に箔をつけたがるので、皆はいつかそれをメツキだと思ひこんだ。点取虫だと言われて、はつと気がつくと、豹一はもう「首席」という渾名に芸もなくやに下つていられなくなり、自分が勉強もろくろくせずに首席になれたことを皆に思ひこませようとした。試験の前日にはかならず新世界の第一朝日劇場へ出かけてマキノ輝子の映画を見、試験の日にそのプログラムの紙を持ってきてみせた。それで最初何か自信のなさから来る謙遜けんそんめいたものを豹一に見ていた者も、否応なしに傲慢うまんだと思わされた。

やがてクラスの者に憎まれた。しかし彼の敵愾てきがい心は人々を最初から敵てきと決めていたから、憎まれてかえつてサバサバと落着いた。美貌に眼をつけた上級生が無気味な媚こびで近寄つてくると、かえつてその愛情に報むくいる方法を知らぬ奇妙な困惑こんわくに陥おちいつた。

ずっと首席を続けて三年生になつた。ある日の放課後、クラスの者たち全部からとりまかれ、点取虫のくせに生意気やぞと鉄拳制裁てっけんせいさいをされた。三十人ほど相手に奮闘したが、

結局無暴だった。鼻血をふきだしながら白い眼をむいていた。鼻の穴に紙きれを突っ込んだ妙な顔を職員便所の鏡にうつしてみて、今に見ろと叫んだ。それから十日ほど経ち、学期試験が始った。泡喰って問題用紙にしがみついているクラスの者の顔を何とあさまじいと見たとたん、いきなり敵愾心が頭をもたげて、ぐっと胸を突き上げた。ざまあ見ろと書きかけた答案を消し、白紙のままで出し、胸を張って教室を出た。はじめてほのぼのとした自尊心の満足があつた。落第した。

二度目の三年の時、教室でローマ字を書いた名を二つ並べ、同じ字を消して行くという恋占いが流行^{はや}った。黒板が盛んに利用され、皆が公然^{おおびら}に占っているのを、除^のけ者の豹一はつまらなく見ていたが、ふと誰もが一度は水原紀代子という名を書いているのに気がついたとたん、眼が異様に光った。最も成績の悪い男を掴^{つか}まえ、相手にはまるで何を訊こうとしているのかわからぬ廻りくどい調子で半時間も喋^{しゃべ}りたてたあげく、水原紀代子に関する二三の知識を得た。大軌電車沿線のS女学校生徒だと知ったので、その日の午後授業をサボって上本町六丁目の大軌電車構内へ駆け^かつけた。二時間ばかり辛抱強く待って、やつと改札口から出てくる紀代子の姿を見つけることができた。教えられた臙脂^{えんじ}の風呂敷と非常に背が高くスマートだという目印でそれと分り、何がS女学校第一の美人だ、笑わせ

よると思つたが、しかしおおげさに大阪じゅうの中学生の憧れの的だあこがと憧れている点まじを勘定に入れて、美人だと決めることにした。一般的見解に従つたまでだが、しかし碧く澄あおみきつた眼は冷く輝いていて、近眼であるのにわざと眼鏡を掛けないだけの美しさはあつた。二時間もしびれを切らしていたことが弾はみをつけるのに役立はすつて、つかつかと傍へ近寄ると、

「卒そつじ爾ながら伺うかがいますが、あなたは水原紀代子さんですか」

できるだけ月並でないもつたいぶつた言い方をと考えあぐんだ末の言葉であつたから、紀代子も瞬間呆れたが、しかしそんなことはたびたびあることだから、たいして赧あかくもならずに、

「はあ」

と答え、そして、どうせ手紙を渡すのだつたらどうぞ早くと彼を見た。その事務的な表情を見ては、さすがに豹一は続いて言葉が出ず、いきなり逃げだして、われながら不態ぶざまだつた。

不良中学生にしては何と内気なと紀代子は笑つたが、彼の美貌はちよつと心に止つた。誰それさんならミルクホールへ連れて行つて三つ五銭の回転焼を御馳走したくなるような

少年やわと、ニキビだらけのクラスメートの顔をちらと想い^{うか}泛べた。しかし私は違う。彼女は来年十八歳で学校を出ると、いま東京帝国大学の法学部にいる従兄と結婚することになっており、十六の少年など十も年下に見える姉さん面が虚栄の一つだった。それゆえ、その翌日から三日も続けて、上本町六丁目から小橋西之町への舗道を豹一に跟^つけられると、半分はうるさいという気持から、いきなり振り向いて、

「何か用ですの」

と、きめつけてやる気になった。三日間尾行するよりほかに物一つ言えなかった弱気のために自嘲していた豹一の自尊心は、紀代子からそんな態度に出られて、本来の面目を取り戻した。ここでおどおどしては俺もお終いだと思うと、眼の前がカツと血色に燃えて、

「用って何もあります。ただ歩いているだけです」

呶^{どな}鳴るように言くと、紀代子もぐつと胸に来て、

「うろろろしないで早く帰りなさい」

その調子を撥^はね飛ばすように豹一は、

「勝手なお世話です」

「子供のくせに……」

と言いかけたが、巧い言葉が出ないので、紀代子は、

「教護聯盟にいますよ」

と、近ごろ校外の中等学生を取締っている役人を持ちだした。

「いいなさい」

「強情ね、いったい何の用」

「用はない言うてまんがな。分らん人やな」

大阪弁が出たので、紀代子はちらと微笑し、

「用がないのに跟けるのん不良やわ。もう跟けんときでね。学校どこ？」

「帽子見れば分りまっしゃろ」

「あんたとこの校長さん知ってるわ」

「いいつけたらよろしいがな」

「いいつけるよ。本当に知ってんねんし。柴田さんいう人でしょう」

「スツポンいう渾名あだなや」

いつの間にか並んで歩きだしていた。家の近くまで来ると、紀代子は、

「さいなら。今度跟けたら承知せえへんし」

まず成功だったといえるはずなのに、別れぎわの紀代子の命令的な調子にたたきつけられて、失敗だと思った。しかし、失敗ほどこの少年を奮^{ふる}いたたせるものはないのだ。翌日は非常な意気込みで紀代子の帰りを待ち受けた。前日の軽はずみをいささか後悔していた紀代子は、もう今日は相手にすまいと思ったが、しかし今日こそ存分にきめつけてやろうという期待に負けて、並んで歩いた。そして、結局は昨日に比べてはるかに傲慢^{ごうまん}な豹一に呆^{あき}れてしまった。彼女の傲慢さの上を行くほどだったが、しかし彼女は余裕^{よゆう}綽^{しゃく}々たるものがあつた。豹一の眼が絶えず敏感に動いていることや、理^{わけ}由もなくぱツと赧^{あか}くなることから押して、いくら傲慢^{よそお}を装つても、もともと内気な少年なんだと見抜いていたのだ。文学趣味のある彼女は豹一の真赤に染められた頬を見て、この少年は私の反撥^{はんぱつしん}心を憎悪に進む一步手前で喰い止めるために、しばしば可愛い火花を打ち上げると思った。なお、この少年は私を愛していると己惚^{うぬぼ}れた。それをこの少年から告白させるのはおもしろいと思つたので、彼女はその翌日、例のごとく並んで歩いた時、

「あんた私^{うち}が好きやろ」

しかし、

「嫌いやつたら、いっしょに歩けしまへん」

と、期待せぬ巧妙な返事にしてやられた。

「けつたいな言い方やねんなあ。嫌いやのん、それとも好きやの。どっちやの」

好きでもないのに好いてると思われるのは癪しやくで、豹一は返答に困った。しかし、嫌いだというのは打ち壊ぶこわしだ。そう思ったので、

「『好き』や」

好きという字にカッコをつけた気持で答えた。それで、紀代子をはじめて豹一を好きになる気持を自分に許した。

一週間経ったある日、八十二歳の高齢で死んだという讃岐国某尼寺の尼僧のミイラが千日前楽天地の地下室で見世物に出されているのを、豹一は見に行った。女性の特徴たる乳房その他の痕跡こんせき歴然れきぜんたり、教育の参考資料だという口上に惹ひきつけられ、歪ゆがんだ顔で見た。ひそかに抱いていた性的なものへの嫌悪に逆に作用された捨鉢すてばちな好奇心からだつた。自虐じぎやくめいたいやな気持で楽天地から出てきたとたん、思いがけなくぱったり紀代子に出くわしてしまった。変な好奇心からミイラなどを見てきたのを見抜かれたとみるみる赧あかくなった。近眼の紀代子は豹一らしい姿に気づくと、確めようとして眉の附根を引き寄せて、眼を細めていた。そんな表情がいつそう豹一の心を刺した。胃腸の悪い紀代子がか

ねがね下唇をなめる癖があり、この時もおや花火をあげてると思ってなめていた。いきなり、豹一は逃げだした。

あんな恥かしいところを見られたので自分は嫌われたと思いこむと、豹一はもう紀代子に会う勇気を失ってしまった。豹一が二三日顔を見せないのも、彼女は物足らなかつた。楽天地の前で豹一が物も言わずに逃げて行つたことも気に掛つた。あんなに仲よくしていたのに、ひよつとしたら嫌われたのではないかと心配して、やがて十日も顔を見ないと、もう明らかに豹一を好いてる氣持を否定しかねた。だから、二週間ほど経つて、ふと彼の姿を見つけると、ほッとしてずいぶんいそいそした。しかるに豹一は半分逃走だった。会わす顔もないと思つていたところを偶然出くわしたので、まごまごしていた。いきなり逃げだそうとしたその足へ、とたんに自尊心が蛇のように頭をあげてきて、からみついた。あんな恥かしいところを見られたのだから名誉を回復しなければならぬ。からくも思い止つて、豹一はいやによそよそしくした。そんな態度を見て、紀代子はいよいよ嫌われたという想いで、いつそう好いてしまった。それで、その日の別れぎわ、明日の夕方生国魂神社の境内^{けいだい}で会おうと、断られるのを心配しながら豹一がびくびくしながら言いだすと、まるで待つていたかのように嬉^{うれ}しく承諾し、そして約束の時間より半時間も早く出かけて

待っていた。

その夕方、豹一は簡単に紀代子と接吻した。女めいた口臭をかきながらちよつとした自尊心の満足があつた。けれども、紀代子が拒みこばもしないどころか、背中になわした手にぐいぐい力をいれてくるのを感じると、だしぬけに気が変つた。物も言わずに突き放して、立ち去つた。ふと母親のことを思つたそんな豹一の心は紀代子にはわからず、綿々めんめんたる情を書き綴つづつた手紙を豹一に送つた。豹一はそれを教室へ持参し、クラスの者に見せた。彼らはかねてこのことあるを期待していたが、見せられると偽にせの手紙やろ。お前が書いたんと違うかと言わざるを得なかつた。豹一は同級生がこつそり出していた恋文を紀代子からむりやりに奪い取つて、それを教室で朗読した。鉄拳制裁を受けた。なおそれが教師に知れて一週間の停学処分になつた。

同級生に憎まれながらやがて四年生の冬、京都高等学校の入学試験を受けて、苦もなく合格した。憎まれていただけの自尊心の満足はあつた。けれども、高等学校へはいつて将来どうしようという目的もなかつた。寄宿舎へはいつた晩、先輩に連れられて、円山公園へ行つた。手拭てぬぐいを腰に下げ、高い齒の下駄をはき、寮歌をうたいながら、浮かぬ顔をし

ていた。秀才の寄り集りだという怖れで眼をキョロキョロさせ、競争意識をとがらしていたが、間もなくどこいつもこいつも低脳だとわかった。中学校と変らぬどころか、安っぽい感激の売出しだ。高等学校へはいつただけでもう何か偉い人間だと思ひこんでいるらしいのがばかばかしかった。官立第三高等学校第六十期生などと名刺に印刷している奴を見て、あほらしいより情けなかった。

入学して一月も経たぬうちに理由もなく応援団の者に撲られた。記念祭の日、赤い禪をしめて裸体で踊っている寄宿生の群れを見て、軽蔑のあまり涙が落ちた。どいつもこいつも無邪気さを装って観衆の拍手を必要としているのだ。けれども、そう思う豹一にもともとそれが必要だったのだ。記念祭の夜応援団の者に撲られたことを機縁として、五月二日、五月三日、五月四日と記念祭あけの三日間、同じ円山公園の桜の木の下で、次々と違った女生徒を接吻してやった。それで心が慰まった。高校生に憧れて簡単にものにされる女たちを内心さげすんでいたが、しかし最後の三日目もやはり自信のなさで体が震えていた。唄ってくれと言われて、紅燃ゆる丘の花と校歌をうたったのだが、ふと母親のことを頭に泛べると涙がこぼれた。学資の工面に追われていた母親のことが今はじめて胸をちくちく刺した。その涙だった。そんな豹一を見て、女は、センチメンタルなのね。肩に手

を掛けた。豹一はうつとりともしなかつた。間もなく退学届を出した。そして大阪の家へ帰った。

三

学校をやめたと聞いて、

「やめんでもええのに。しやけど、お前がやめよう思うんやったら、そないしたらええ」

と、お君は依然^{いぜん}としてお君であつたが、しかし、お君の眼のまわりが目立つて黝^{くろず}んでいた。仕立物の賃仕事に追われていたことが悲しいまでにわかり、思いがけなく豹一は涙を落したが、なぜかその目のふちの黝^{くろ}さを見て、安二郎を恨^{うら}む気持が出た。安二郎はもう五十になつていたが、醜^{みにく}く肥満して、ぎらぎら油ぎつていた。相変らず、蓄財に余念がなかつた。お君が豹一に小遣いを渡すのを見て、

「学校やめた男に金をやらんでもええやないか」

そして、お君が賃仕事で儲^{もう}ける金をまきあげた。豹一が高等学校へはいるとき、安二郎はお君に五十円の金を渡した。貰^{もら}つたものだと感謝していたところ、こともあろうに、安

二郎はそれを高利で貸したつもりでいたのだ。

豹一は毎朝新聞がはいると、飛びついて就職案内欄を見た。履歴書を十通ばかり書いたが、面会の通知の来たのは一つだけで、それは江戸堀にある三流新聞社だった。受付で一時間ばかり待たされているとき、ふと円山公園で接吻した女の顔を想いだした。庶務課長のじろりとした眼を情けなく顔に感じながら、それでも神妙にいろいろ受け応えし、採用と決った。けれども、翌日行ってみると、やらされた仕事は給仕と同じことだった。自転車に乗れる青年を求むという広告文で、それと察しなかったのは迂濶^{うかつ}だった。新聞記者になれるのだと喜んでいたのに、自転車であちこちの記者クラブへ原稿を取りに走るだけの芸だった。何のことはないまるで子供の使いで、社内でも、おい子供、原稿用紙^{かみ}だ、給仕、鉛筆削れと、はつきり給仕扱いでまるで目の廻わるほどき扱われた。一日で嫌気がさしてしまったが、近いうちに記者に昇格させてやると言われたのを当てにして、毎日口惜し涙を出しながら出勤した。一つにはそこをやめてほかに働くところもありそうになかったからだ。

ある日、給仕のくせに生意気だと撲^{なぐ}られた。三日経つと、社内で評判の美貌^{びぼう}の交換手を接吻した。

最初の月給日、さすがにお君の喜ぶ顔を想像していそいそと帰ってみると、お君はいなかった。警察から呼出し状が出て出頭したということだった。三日帰ってこなかった。何のための留置りゆうちかわからなかったが、やつれはてて帰ってきたお君の話で、安二郎の脱税に関してだとわかった。それならば安二郎が出頭しなければならぬのにと豹一は不審に思った。だんだんに訊いてみると、安二郎は偽にせの病氣を口実にお君を出頭させたのだとわかった。そんなばかなことがあるかと安二郎に喰くつてかかると、

「生意気ぬかすな。わいが警察へ行くのもお君が行くのも同じこつちや。夫婦は一心同体やぜ」

子供にいいきかすような口調だった。

「そんならなぜお母はんに高利の金を貸すんです？」

と、豹一が言うのと、

「わいに文句あるんやったら出て行つてもらおう」

母親もいっしょにと思ったが、豹一はひとりで飛びだしてしまった。出て行きしな、自分の力で養えるようになったらきつと母を連れに来ますと、集金人の山谷に後のことを頼んだ。かねがね山谷はお君に同情めいた態度を見せ、度を過ぎていると豹一は苦にが々しか

つたが、さすがに今はくれぐれも頼みますと頭を下げた。便所でボロボロ涙をこぼした。そして、泣いて止めるお君を振りきつて家を飛びだした。

その夜は千日前の安宿に泊った。朝、もう新聞社へ行く気もなかった。毎日就職口を探して歩いたが、家出した男を雇^{やと}つてくれるところもなかった。月給袋のなかの金が唯一の所持金だったが、だんだんにそれもなくなくなって行つた。半分は捨鉢^{すてばち}な気持で新聞広告で見た霞町のガレーチへ行き、円タク助手に雇われた。ここでは学歴なども訊かれず、かえってさばさばした気持だった。しかし、一日に十三時間も乗り廻すので、時々目が眩^{くら}んだ。ある日、手を挙げていた客の姿に気づかなかつたと、運転手に撲^{なぐ}られた。翌日、その運転手を通いつめていた新世界の「バー紅雀」の女給品子は豹一のものになった。むろん接吻はしたが、しかしそれだけに止まった。それ以上女の体に近づけない豹一を品子は狂わしくあわれんだが、しかし、豹一は遠くで鳴っている支那そば屋のチャルメラの音に思いがけず母親の想出にそそられて、歪^{ゆが}んだ顔で品子に抗^{あらが}った。

運転手に虐^{ぎやく}待^{たい}されても相変らず働いていたのは品子をものにしたという勝利感からであつたが、ある夜更^{よふ}け客を送つて飛田遊廓の××楼まで行くと、運転手は、

「どや、遊んで行こうか。ここは飛田^{びた}一の家やぜ」

どうせ朝まで客は拾えないし、それにその日雨天のため花火は揚らなかつたが廓^{くるわ}の創立記念日のことであるし、なんぞええことやるやろと登楼^{すう}を薦めた。むろん断つたが、十八にもなつてと嘲^{あざけ}られたのがぐつと胸に来て登楼^{あが}つた。長崎県五島の親元へ出す妓^{おんな}の手紙を代筆してやりながら、いろいろ妓の身の上話を聞いた。話は結局こういう生活をどう思うかというところに落着いたが、妓が金に換算される一種の労働だと思ひ諦^{あきら}めているのを知つて、だしぬけに豹一の心は軽くなつた。今まで根強く嫌悪していたものが、ここでは日常茶飯事として簡単に取引きされていたのだ。そういうことへの嫌悪にあまりに憑^つかれていた自分があほらしくなつた。豹一ははじめて女を知つた。けれども、さすがに窓の下を走る車のヘッドライトが暗闇の天井を一瞬明るく染めたのを見ると、慟^{どうこく}哭の想いかられた。

どういう心の動きからか、豹一はその後妓のところへしげしげと通つた。工面して通う自分をあさましいと思つた。なぜ通うのか訳がわからなかつた。惚^ほれているという単純な言葉がなかなか思ひつかなかつた。嫌悪しているものに逆に引きつけられるという自虐のからくりには気がつかなかつた。ある朝、妓が林檎をむいてくれるのを見て、胸が温つた。

無器用な彼は林檎一つむけず、そんな妓の姿に涙が出るほど感心し、またいじらしくもあり、年期明けたら夫婦になろうと簡単に約束した。

こんなことではいつになつたら母親を迎えに行けるだろうか、情けない想いをしながら相変らず通っていたが、妓は相手もあらうに「かん瘡つりの半」という博奕ばくちう打ちに落籍ひかされてしまった。「瘡つりの半」は名前のごとく始終体を瘡けいれん癩いれんさせている男だが、なぜか廓の妓たちに好かれて、彼のために身を亡した妓も少くはなかった。豹一は妓の白い胸にあるホクロ一つにも愛惜を感じる想いで、はじめて嫉妬しつとを覚えた。博奕打ちに負けたと思うと、血が狂暴に燃えた。妓が「瘡つりの半」に誘惑された気持に突き当たると、表情が蒼あおす凄ごんだ。不良少年と喧嘩けんかする日が多くなった。そして、博奕打ちに特有の商人コートに草履ぞうりばきという服装の男を見ると、いきなりドンと突き当り、相手が彼の瘦やせた体をなめて掛つてくると、鼻血が出るまで撲なぐり合つた。

ある日、そんな喧嘩けんかのとき胸を突かれて、げつと血を吐いた。新聞社にいたころから時々自転車の上で弱い咳せきをしていたが、あれからもう半年、右肺尖カタル、左肺浸しんじゆん潤と医者が即座にきめてしまったほど、体をこわしていたのだった。ガレーヂの二階で低い天井を睨にらんで寝ていたが、肺と知って雇主も困り、

「家があるんやったら知らせたらどないや」

待つていましたとばかり、母親に手紙を書いた。不^ふ甲^{がい}斐^いない人間と笑つてください。どうせ今まで何一つ立派なこともしてこなかった体、死んでお詫^わびしたくとも、やはり死ぬまで一眼お眼に掛りたく……。最後の文句を口実に、自嘲しながら書いた。さっそくお君が飛んでくると思つていたのに、速達で返事が来た。裏書きが毛利君^{きみ}となつており、野瀬君^{きみ}でないのに、はつと胸を突かれた。行きたいけれど行けぬ。お前に会わす顔のない母です。恨^{うら}んでくれるな。腑^ふに落ちかねる手紙だった。手紙と一足違いに意外にも安二郎が迎えに来た。

安二郎の顔を見て、豹一は呆氣にとられてしまい、しばらくは口も利けなかったが、

「じつはお前の母親のことやが……」

と、わざとお君とも女房とも言わずに話した安二郎の話を聞いて、事情がわかった。安二郎の話によると、集金人の山谷はお君を犯したのだった。豹一が家出してからのお君の空虚な心に山谷が醜くつけこんだと、豹一にも想像がつき、聞くなり悲しく顔が歪^{ゆが}んだ。しかし、安二郎の表情はもつと歪んでいた。むろん山谷を追いだしたのだが、山谷の

ねつとりと油の浮いたような顔は安二郎の頭を絶えず襲ってきた。安二郎の顔にはみるみる懊惱おうのうの色が刻みこまれた。罵倒ばとうしてみても、撲ってみても心が安まらなかった。安二郎は五十面下げて嫉妬しつとに狂いだしていた。お君がこっそり山谷に会わないだろうかと心配して、市場へ行くのにもあとを尾行つけした。なお、自分でも情けないことだが、何かにつけてお君の機嫌をとるのだった。安二郎もどうやら痩せてきた。貸金の取りたてに走り廻っている留守中、お君が山谷に会っているかもしれないと思うと、もう慾も得もなく、集金の途中で帰ってしまうのだった。——そんな安二郎の苦悩はいま豹一は隅々まで読みとれた。「じつはお前の居所を知りとうてな。探してたんや。新聞広告出したん見えへんかったんか」

と言ひ、そして家へ帰つて、お君によくいきかせ、なお監視してくれと頼む安二郎を、豹一は、ざまあ見ろと思つた。けれども、そんな安二郎を見るにつけ、××楼の妓に嫉妬しつとした自分の姿を想ひ知らされてみると、この男も人間らしくなつたと、何か安二郎に同情した。思わぬ豹一に同情されて、安二郎は豹一が病氣でなければいっしょに酒を飲みたいくらいの氣持を芸もなく味わされ、意外な父子の対面だった。

お君は紙のように白い豹一の顔を見たとたんに、おろおろと泣いた。円タクの助手をや

つたと聞かされ、それが自分のせいのように自責を感じ、

「みんな私が悪かったのや、私の軽はずみを嗤^{わら}つとくれやす」

と、顔もよう見ないで言った。着物の端を引っ張り、ひっぱりして、うなだれているお君を見て、豹一は、

「何も母はんが悪いのんと違う。家出した僕が悪いのや。気を落したらあきまへん」と慰め、女の生理の脆^{もろ}さが苦しいまでに同情された。

ガレーヂの二階で寝ていたころとはすっかり養生の状態が変った。お君は自分の命をすりへらしてもと、豹一の看病に夜も寝なかった。自分をつまらぬ者にきめていた豹一は、放浪の半年を振りかえつてみて、そんな母親の愛情が身に余りすぎると思われ、涙脆く、すまない、すまないと合^{がっしょう}掌^{しょう}した。お君はもう笑い声を立てることもなかった。お君の関心が豹一にすっかり移ってしまったので、安二郎は豹一が存在を徳とし、豹一の病気を本能的に怖れていても公然とはいやな顔をしなかった。

しかし豹一は二月も寝^{ふた}ていかなかった。絶えず何かの義務を自分に課していなければ気のすまぬ彼は、無^{むいとしよく}為^{むいとしよく}徒食の臥床生活がたまらなく情けなかった。母親の愛情だけで支えられ

て生きているのは、何か生の義務に反くそむと思うのだった。妓に裏切られた時に完膚なきま
 でに傷ついた自尊心の悩みに駆りたてられていた。熱が七度五分ぐらいまでに下ると、い
 きなり寢床を飛びだし、お君の止めるのもきかず、外へ出た。谷町九丁目の坂道を降りて
 千日前へ出た。珍しく霧の深い夜で、盛り場の灯が空に赤く染まっていた。千日前から法
 善寺境内にはいると、そこはまるで地面がずり落ちたような薄暗さで、献納けんのうちよう提灯や
 とうみよう
 灯 明の明りが寝呆けたように揺れていた。境内を出ると、貸席が軒を並べている芝居
 裏の横丁だった。何か胸に痛いような薄暗さと思われた。前方に光が眩まぶしく横に流れてい
 て、戎橋筋えびすばしだった。その光の流れはこちらへも向うの横丁へも流れて行かず、笥かけひを流
 れる水がそのまま氷結してしまったように見えた。何か暗澹あんたんとした気持で、光を避けて
 引きかえしたが、また明るい通りに出た。道頓堀筋だった。大きなキャバレエの前を通
 ると、いきなり、アジャーアジャーとわけのわからぬ唄歌、とたんに打楽器とマラカスが
 チャイナルンバを奏しだしたのが腹立たしく耳にはいった。軽薄なテンポに、××楼の広
 間でイヴニングを着て客と踊っていた妓の肢態したいを想いだした。カツと唇をかみしめながら、
 キャバレエの中へはいつて行つた。このナンバーワンは誰かと訊きいて、教えられたテ
 ーブルを見ると、銀糸のはいつた黒地の着物をいちじるしく拔襟ぬきえりした女が、商人コート

を着た男にしきりに口説くどかれていた。呼ぶとすらりとした長身を起して傍へ来た。豹一はぱつと赧あかくなつたきりで、物を言おうとすると体が震えた。呆あきれるほど自信のないおどどした表情と、若い年で女を知りつくしている凄すこみをたたえた睫毛まつげの長い眼で、じつと見据すえていた。

その夜、その女といつしよに千日前の寿司捨で寿司を食べ、五十錢ギザイチで行けと交渉した自動車で女のアパートへ行つた。商人コートの男に口説かれていたというただそれだけの理由で、「疳ふくしゅうつりの半」へ復讐ふくしゅうめいて、その女をものにした。自分から誘惑しておいてお前はばかな女だと言つてきかせて、女をさげすみ、そして自分をもさげすんだ。女は友子といい、美貌みほだったが、心にも残らなかつた。

ところが、三月みほとして戎橋筋を浮かぬ顔して歩いていると、思いがけず友子に出会つた。あんたを探していたのだと、友子は顔を見るなりもう涙を流していた。妊娠しているのだと聞かされ、豹一ははつとした。友子は白粉おしろい気もなくて蒼い皮膚を痛々しく見せていた。豹一は友子と結婚した。家の近くに二階借りして、友子と暮した。豹一は毎日就職口を探して歩き、やつとデパートの店員に雇われた。美貌を買われて、婦人呉服部の御用承り係に使われ、揉手もみでをすることも教えられ、われながらあさましかつたが、目立って世

帯じみてきた友子のことを考えると、婦人客への頭の下げ方、物の言い方など申分ないと
 褒められるようになった。その年の秋友子は男の子を産んだ。分娩ぶんべんの一瞬、豹一が今ま
 で嫌悪してきたことが結局この一瞬のために美しく用意されていたのかと、何か救われる
 ように思った。その日、産声うぶごえが室に響くようなからりと晴れた小春日和だったが、翌日
 からしとすると雨が降り続いた。六畳の部屋いっぱいにお襦袢むつを万国旗のように吊るした。
 お君はしげしげと豹一のところへやってきた。火鉢ひばちの上でお襦袢を乾かしながら、二十
 歳で父となつた豹一と三十八歳で孫をもつたお君は朗ほがらかに笑い合つた。安二郎から、はよ
 歸つてこいと迎えが来ると、お君は、また来まっさ、さいならと友子に言つて、雨の中を
 歸つて行つた。一雨一雨冬に近づく秋の雨が、お君の傘かさの上を軽く敲たたいた。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」2 織田作之助 井上友一郎集」集英社

1975（昭和50）年3月8日発行

初出：「海風」

1938（昭和13）年11月

入力：土屋隆

校正：米田

2011年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

雨

織田作之助

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>